〈鳥海山麓だより11〉

コメ倉庫

鈴木京子

今年もまた、農協のコメ倉庫で季節労働をした。九月の彼岸前後から約ひと月、朝から晩までコメを買い入れては入庫する。今年でもう五年になった。

籾のまま受け入れて、乾燥・貯蔵・調整の三役を担うカントリーエレベーターとは違い、私が働く倉庫はいわゆる「バラ施設」だ。農家が自分で乾燥・脱穀・調整（粒をそろえたり異物を除去したりして製品として完成させる）を終えた玄米を、等級検査と計量をして買い入れ、ＪＡブランドの一トン袋に充填して低温倉庫で貯蔵する。二十人ぐらいの季節労働者のうち、だいたい三分の一が女性で、三分の二は去年も一緒に働いた人たちだ。

一日中、コメまみれ、埃まみれになって、一トン袋を押したり、三〇キロ袋の積み下ろしをするような重労働だが、時給は男性一三〇〇円、女性八〇〇円とこの辺りの相場としては〝破格〟だ。男女とも定年後の六十代が多く、たまに失業中の三十代や四十代が紛れ込んでくる。二年、三年と

続けて働くようになると、顔馴染みの間では「同僚」意識も育ってきて、「〇〇倉庫では二等米がよけい（多い）だと」「××倉庫は慰労会で塩竈へバス旅行だと」など、近隣の倉庫に妙な対抗心を燃やしたりする。

ただ、農家でない六十歳以下の労働者が入ってくると、一年目は何も言われないが、二年目には寄ってたかって説教される。「若いモンが、季節労働に毎年来るもんでねっ」「この一年、何してただ？　本気で仕事、探したか？」って。

今年の若いモンは、私より長いキャリアの三十代が二人に、初めて来た二十代と四十代が一人ずつ。三十代のマサトはコメ農家の跡取りで、コメ倉庫が終わると、地元の酒造会社で春先まで働く。もう一人のイシカワ君は、三年目ぐらいまではみなに説教も心配も職の紹介もされていたが、今はもう誰も口出ししない。ずっと定職にはつかず、母親と二人暮らしで、独立した二人の兄からの仕送りがあるらしい。

二十三歳のササキ君は農家で、祖父母に近い年齢の集団の中で、気も体力も消耗させてクルクルと働いた。そのせいか、途中、体調を崩して三日休んだが、休み明けには「ご迷惑をおかけしました」と、カボチャパイを持参して出勤した。

四十代のクロさんは、無口だが愛想が悪いというわけでもなく、長めの茶髪のせいか三十代にしか見えない。細身ながら力仕事には慣れているようで、年長者を気遣い、率先して三〇キロ袋の積

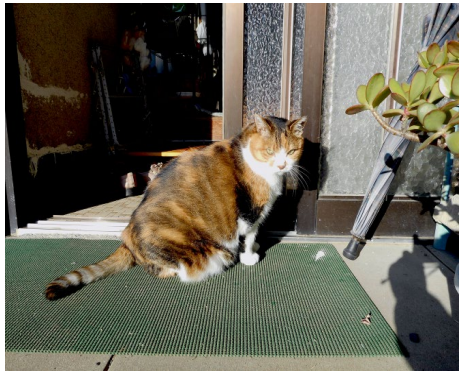
み下ろしをしていた。ただ、自分で運転せず誰かに送迎されているという〝ミステリー〟を提供し、「免許がないか、車がないか、何らかの理由で免停か」と、女性労働者の間の最大の噂のネタとなった。終盤には「夜の仕事をしていて、朝の出勤までにアルコールが抜けていないから」という情報が出てきたが、誰も本人に確かめないまま、今年のコメ倉庫は閉まった。

さて、来年は誰とまた会えるカナ。

Photo : Suzuki Kyoko

コメ倉庫の様子

普通の猫に見えるけど…



名前は「チビ」なのに、老父が猫かわいがりすぎてすごくデカくなってしまった実家の猫